
キシヒメ番外編集

羽鳥 紘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キシヒメ番外編集

【Nコード】

N7677J

【作者名】

羽鳥 紘

【あらすじ】

完結作品『キシヒメ』の番外編集です。予告なく本編のネタバレが出るので一応本編読後推奨。ネタバレが気にならない方は、ずいとうござい。

p u r e w h i t e (前書き)

本編開始前のお話。

pure white

白い。とても白い。その白さは、眩しすぎて目を瞑りたくなる。

「……目に染みるほど白いですね」

思わず吐いた嫌味は、声が震えていた。

今の季節、城下町には雪が降りる。冷え込みも一番厳しい時期に差し掛かり、暖炉に火をいれても、その傍にいなければ少々肌寒い。しかし声が震えたのは、断じて寒さのせいではないこともまた、明言すべきだっただろうか。

「そうだな。昨夜は雪が積もった」

しゃあしゃあと返ってきた声に、開きかけた双眸をまた閉じる。やはり明言すべきだった。

悪気のない声は、反省していないのか、いつそ気持ちがいいほど天然なのか。おそらくは後者で、必然的にそれは前者も含む。しかし、この状況でどうしてそこまでボケ倒すことができるのか。

毎日毎日お決まりになった、長く深いため息をついて ライゼスは手にした帳面をぱたりと閉じた。

その中身は、白く白く、眩しいほど白い。

「教育係……ですか？ 僕が？」

鍋をかき混ぜる手を止めないまま、ライゼスは視線と驚きを多分に含んだ声とを父に投げた。

帰宅したばかりの父の方は、こちらを見てはこなかった。軍服を脱いで椅子にかけ、自らもその椅子に体を預けてひといきつくまで、当然のようにライゼスの疑問はなかったことのように無視される。椅子にふんぞり帰って大きく息をついてから、初めてライゼスが喋ったことに気付いたように、ワンテンポ以上遅れてから父は答えてきた。

「ん？ ああ。アルフェスと姫が是非にとね」

「父上。いくら家の中で、いるのが僕だけだからって、陛下を呼び捨てにするのはやめてください。そして、妃殿下は姫ではありません。紛らわしいです」

「若い頃に慣れたものってさ、歳とってから変えるのむずかしいんだぜ。お前にはまだ解らんだろうが」

「父上はまだお若いですよ」

「冗談を言うつもりなら、もっと楽しそうに言えよ」

「事実を述べたままでですから。そもそも父上は公私の分別がないだけで、歳は関係ないでしょう」

ふう と、ヒューバートがため息をつく。

「……お前、なんかエレンに似てきたね」

「息子ですからね、似てもおかしくないでしょう」

「オレには似てないな。息子なのに」

「血が繋がってないんじゃないですか」

さらりとそんなことをのたまった息子を見て、ヒューバートは絶句した。そこで初めてライゼスへ目を向けると、だが彼の方はもうこちらを見てはおらず、冷めた目で鍋の中で煮えているものの味見をしている。

まだ6歳になったばかりの息子は、あどけない顔とは全く釣り合わない、大人びた表情をよくする。踏み台を使って家事をする姿も、微笑ましいというより板についていた。そうさせているのはひとえに自分のせいなのだろうが、それを棚に上げて、非常に可愛くないなどとヒューバートはよく思う。

「どーゆー意味よそれ」

「別に。それより話がずれました。僕が姫様の教育係とは、どういうことですか？ 僕のような子供でなくとも、姫様の家庭教師は大勢いらっしやるでしょう」

火を弱め、ライゼスは踏み台を降りた。そしてそれを手際よく流しの方へ移動させ、再び登って今度は野菜を洗う。

「……その大勢が揃って匙を投げたからさ。あのチビ姫の勉強嫌いは筋金入りだ」

「そのうち不敬罪で捕まっても知りませんよ」

「それで姫が、同じ年ごろのお前の言うことなら聞くんじゃないかとね。幸いお前は賢いし、一般教養くらいなら教えられるだろう」

こちらの小言は全無視の方向になったらしい。葉物をちぎってサラダを作りながら、ライゼスは嘆息した。当然、父は構わず言葉を続けてくる。

「そんなわけで、近々陛下からお呼びがかかるだろう。無礼なことはするなよ」

ぐしゃりと。ライゼスは思わず持っていた野菜の葉を握りしめた。その手が震えるのは、水が冷たいからではない。衝動のままつつこむか、大人になって耐えるか、僅かの間逡巡する。だが耐えられるほど、まだライゼスも大人ではなかった。

「あ、あなたに言われたくありません!!!」

金切り声がレゼクトラ邸のリビングを揺らした日のうちに、ライゼスは城へ上がることになった。

それから、既に数日が過ぎていたが、未だに一度とて、問題の姫はまじめに勉強しようとはしない。宿題もしない。これでは家庭教師が匙を投げるのも仕方ないだろう。ライゼスとて、純粹に授業をしにきているのであれば、こんな実のないことは断りたいところである。だが。

ふいに頬を冷たい風が撫でて、ライゼスは顔をあげた。いつの間にか、セラが窓辺に椅子を運び、それを踏み台にして窓を開け放っている。

「あ、危ないですよセラ！」

慌ててそちらに駆け寄り、ライゼスは椅子をささえた。

「やっぱり白いな。いや、きらきらして銀色だ！　すごく綺麗!!!」

先刻セラが述べたとおり、昨夜は一晚中雪が降っていた。きつと、窓から見える城下の町並みも、雪化粧していることだろう。今朝方には雪は止み、陽が覗いていたから、雪がその光を反射して輝いていることを言っているのだろう。興奮を隠せない声で叫んだセラは、こちらを見下ろして微笑んだ。

そんな顔をされるとどうにも弱い。

もちろん勉強を教えることが第一目的であるから、こんな雑談ばかりしているわけにもいかない。だが、ライゼスは、そんな他愛のないセラの話聞くことは、決して嫌いではなかった。言うことを何ひとつとして彼女は聞いてくれないが、こちらを嫌われているというわけではなさそうだった。だから、楽しそうに話を振ってくる彼女を無碍にはできない。

「外に行ってみたいなあ……」

再び窓の外に目を戻し、セラがふと呟いた言葉に、ライゼスは眉を落とした。

でも、きつと。

こういうときの為に、自分はいるのだと思う。

「あとで、陛下にお願いしてみますよ」

そう声をかけると、セラはきよとんとこちらを見下ろした。だがみるみるうちにその表情は満面の笑みと化し、目を輝かせながら椅子を飛び降りる。

「あ、危ない……」

「本当か!？」

飛びつかんばかりの勢いで詰め寄るセラに苦笑しながら、ライゼスは頷いてみせる。

「ええ。……ですから、今日は少しは勉強の方もしてくださいね？」

「うー……」

途端にセラの顔から笑みが消える。それでもセラはしぶしぶと机に向かった。

「嫌いでも、少しはしておかないと後で困りますよ？」

「困らないもん」

子どものように 事実子どもだが セラがきつとこちらを見上げて断言する。

「勉強、してない方がいいこともある」

「なんですか、それ」

呆れてこたえると、セラはペンを置き、ぎつと椅子の背もたれに上体を預けた。顎をそらして、やや後ろにいたこちらの顔を覗き込み、そして彼女はにこつと笑った。

「だって、私が勉強しないから、ラスがきたんだろ？」

「……………ッ」

無邪気な笑顔に、ライゼスが言葉を失う。

だから、いつも、強くは言えなくなる。ときおり、彼女は物凄く狡猾なのではないかと勘繰りたくなるが、それにはあまりに無垢な瞳はそんな邪推も吹き飛ばす。

だからきつと。

じゃじゃ馬でも勉強嫌いでも喧嘩しても。必要とされる限り、自分分は彼女の傍にいるのだろつ。

homework (前書き)

二幕開始直前くらいのお話。

homework

朝。いつも通りに行くそれを、いつもとは違う場所で迎えて、何回目になるか。

そろそろこの場所を“いつも通り”のカテゴリにいれてもいいのかもかもしれない。今までの“いつも通り”は、多分もう一生やってはこないだろう。それでも今まで過ごした時間とこの新しい環境を計りにかけてみれば圧倒的に今の方が軽いわけで、慣れたかと問われればイマイチだと答えざるを得ない。だが、今までとどちらが良かったかと問われれば、“今”だと、光より速く即答するだろう。ほんの少し残る苦味と共に。

目覚めて起き上がるまでの間に、ざっとそんなことを考える。眠気はもうない。イレギュラーがなければ定時に目覚め、そしてひとたび目覚めればどこまでも意識が覚醒してしまう性質だった。便利といえれば便利だが、まどろみを楽しみたいときには一寸邪魔だ。苦笑と共にベッドを降りて窓を開ける。気持ちのいい風が、締め切られて淀んだ部屋の空気を流す。それが起き抜けの素肌に心地よく上着を羽織るか否か悩んでいると、窓の外に見知った姿を見つけた。「セラちゃん？」

まさかと思いながらも、その姿を見間違える筈もなく。確信を持って呼んだ名に、何故かこそこそと人目を避けて歩いていたその人物は、跳ね上がらんばかりに驚いてこちらを見た。そしてすぐに表情に安堵を滲ませます。

「なんだ、ティルか」

「なんだとはつれないねー。俺ちょっと傷ついた」

「あ、いやそういう意味ではなくて。ていうか何か着るよ」

大げさに泣き真似をしてみせるティルに、セラは少し困ったような顔をした。

「やだなあ下はちゃんと穿いてるよー」

「あ、あのねえ……」

セラの目が泳いでいることに気付いて、茶化してみせる。男勝りなセラのそんな一面はちょっと意外で可愛かったが、さすがにこの格好で迫ったらただの痴漢だ。

「今起きたもんでね、ゴメンゴメン」

笑いながら上着を羽織っている、ほっと息をつく音と、そして窓枠がきしむ音が聞こえてきた。

後者の音を不審に思って振り返ると、丁度セラが窓から侵入してくるところだった。

「つて、何してんのセラちゃん!？」

「いや、その、ちょっと匿ってもらおうと思って」

部屋にあがってきたセラがきまわずそうに呟く。何で隠れているのかに追われているのかも気にならなかったといえば嘘だが、それを問う前にテイルは大きな溜め息をついた。

「何があつたか知らないけど。あんま不用意に男の部屋に侵入しない方がいいよ」

「なんで?」

言うとは思ったが本当に言われてしまうと軽く頭痛がした。

(ボーヤが過保護なのも無理ないか……いや、過保護だからこうなるのか。いやいや、ここは俺が信用されているんだと前向きな答えを出しておこう)

脳内で勝手に自己完結して、テイルは当初の疑問の方をぶつけることにした。

「で、なんでセラちゃんは隠れてるわけ?」

「えーと、そのへんのことには気にしないでくれるとありがたいというか」

目をあさつての方へむけ、上ずった声でセラが答える。そんなことを言われると、気になるのが人情だ。

「すごく、気になるんだけどなあ……」

「ほんとにたいした理由じゃないから!」

セラが片手を顔の前に出して、ぶんぶんと振る。だがそれで気付いた。逆の手に、何か持っている。

「セラちゃん、それ何」

「何でもない!!」

問うと、慌てて体の後ろに隠す。死守の体勢に入ったセラを見て、だがティルはにやりと笑った。そしてすぐに笑みを消し、

「あ　！？　セラちゃん後ろ!!」

叫ぶ。反射的にセラが振り向き注意が逸れて、その際にティルは難なくセラの持ち物を奪うのに成功していた。

「あ　！？」

「うん、俺セラちゃんのそういうところ凄く好き」

楽しげに呟きながら、ティルは奪取したセラの所持品をしげしげと眺めた。

「なにこれ。教科書と問題集？」

「……今から講義なんだ」

観念したように、セラは肩を落とすと力なく事情を語りだした。

「けど、宿題やってないし、怒られるかと思うと億劫で……」

「なーんだそんなことかあ」

問題集をパラパラとめくりながらティルは苦笑した。

「でもサボっちゃ駄目だよ、セラちゃ……」

「お願いティル！ 今日だけ！ ね！ このとーり！」

諭そうとしたのだが、必死の様相で縋り付かれてティルは思考が停止した。そして停止後、よからぬ方向に暴走しかけた思考をなけなしの理性で引き戻す。

「うっ……わかったよ。わかったからちよつと離して。危険」

「う、うん……？」

何が危険なのかは絶対にわかってないだろうが、とにかく離れたセラを見て、ティルは大きく息をついた。そのまま何度か深呼吸をしながら邪念を追い払う。

「ぶっ。じゃあ宿題やろうよ。やるつもりで持ってるんでしょ？」

「それはそうだけど。もう絶対間に合わないよ。その前にラスに捕まっちゃう」

「じゃあここでやんなよ。ボーヤが来たらそりゃもう全力で追っ払うからさ。これくらい、半刻もかからないでしょ？」

「む、ムリだよ！ テイルはできるのか？」

目を丸くしてこちらを向いたセラに、テイルは改めて問題集に目を通した。

「俺なら……まあ、15分てとこかな」

顔を上げて視線をセラに戻す。すると、セラはキラキラした目でこちらを見返してきた。それでなんとなく、セラの次の言葉が予想できる。

「やって」

「言っと思った……」

半眼で溜め息をつきつつ、だがテイルはペンを持つと机に向かった。

「いいけど、セラちゃんも少しは自分で考えるんだよ。解らなかつたら教えるから」

「う、うん」

隣に椅子を並べると、渋々だがセラは腰を降ろした。それを見て、テイルが問題を指しながら口を開く。

「じゃ最初の問題。これは解るよね？」

テイルの問いかけに、セラは問題集へと目を移した。そして、その問題を読むために文字を追う目が、だが次第にとろんとまどろんでゆく。そして、ごとんと頭を落とす。何事かと驚くテイルの目の前で、セラは安らかな寝息を立てて熟睡していた。

「早ッ！」

突っ込みを入れてもセラが起きる気配はない。勉強が苦手だとは聞いていたが、まさかこれほどとは思わずに、残されたテイルはただ苦笑するしかなかった。

「まったく……姫のくせに剣は振り回すわドレスは着ないわ講義は

サボるわ。俺、城に居る間そんなことしたことないぜ」

とんだじゃじゃ馬姫だ。だが、そんな彼女に惹きつけられてやまないのもまた事実だった。そっと手を伸ばし、セラの前髪を掬う。輝くアツシユブロンドが、ティルの白い指を滑った。それを見て目を細める。

彼女と出会ってまだ日は浅い。だから、きっとまだセラのことは知らないことの方がずっと多い。だけど、何を知ってもどれだけ日が経っても、忘れない。

はじめて自分を見てくれたひと。

だから、只々愛しく、只々焦がれる。

ふと真顔になると、ティルは眠るセラの額に口付けた。

「ま、この件の貸しは、これでいいや」

独りごちる頃には、いつものふざけた調子に戻って。セラの髪から手を離し、ティルは再び机に向かった。

そんな、いつもの朝。

L e t · s p l a y t a g g ! (前書き)

四幕「セラの決意6」あたりの陛下と隊長のお話。

Let's play tag!

Bannon、と、壊れてしまいそうに激しい音を立て、執務室の扉が開かれる。番をしていた兵がその勢いで顔面を打ったが、そんなことは誰が気にするわけでもないことで。

「待て、ヒューー!!!」

兵士が顔を押しさえていると、誰かが駆け出して行くのが指の隙間から見えた。間髪いれず、誰かがそれを追いかけて、また目の前を行き過ぎて行く。そのあたりで兵士は手を離し、その後ろ姿を見て仰天した。

「へ、陛下!?!」

そんな悲鳴は二人に届くことはなく。

「待てと言っている! 国王命令だぞ! 聞かなかつたらどうなるかわかっているんだろうな!」

「知るか! 総隊長を辞めていいならいつだって大歓迎だ!」

「その上国外追放するぞ!」

「そうしたらお前友達いなくなるぞ!」

大の大人が二人駆け抜けて行くのを、掃除をするメイド、警備をする騎士が目を剥いて見送る。そのうちの何人かが、廊下を走るなと喋りかけて硬直する。騒ぐなど言いかけて、開けた口を尚開ける。真昼間から迷惑な鬼ごっこをしているのが、それもこの上なく低レベルな口げんかをしながらだ、ほかならぬ自国の王と騎士団隊長だからである。

「いいから、待てと言っている!」

ひゅ、と空を切る音に、ヒューバートは首を少し横にずらし、左手をあげてピースした。その人差し指と中指を閉じた瞬間、冷たい金属の温度が指に伝わる。

「待ったら行かせちゃくれないだろ?」

それを手の中でくるりと翻し、ヒューバートは立ち止った。振り

向くと、同様に国王　アルフェスも立ち止まって真剣な目をこちらに向けてくる。

「当たり前だ。お前に今城を空けられたら困る」

「何、ファラステルまでチビ姫を迎えにいくだけだよ。それくらいいいだろ」

「良いわけあるか！　大体それは親衛隊の仕事だろう。ただでさえ少ない親衛の仕事を取るんじゃない！」

「じゃーただでさえ多いオレの仕事を、親衛が手伝ってくれればいい。ラルフィリエルはオレなんかより有能よ？」

ヒューバートに引くつもりがないのを察して、アルフェスは肩を竦めた。詮無い言い合いを少し休んで、鬼ごっこで切れた息を整える。暫く寝ていなかったところに全力疾走をして気持ち悪かった。

そして落ち着いたところで、握りしめていた手の力を抜く。そこには書状があつて、持ちっぱなしだったことをようやく思い出す。力を入れて握りしめていたのでぐしゃぐしゃになってしまったそれに再び視線を落とす。そこに並ぶ字は、綺麗だが少し急いだ感がある。

「……お前が総隊長を望んでやってるわけじゃないことは知ってる。それに、お前がいなかったら僕は国王なんかやっていられない。それは確かだ。だからお前を止める術なんか僕にはないが、ヒュー。どうしてそんなに城を離れたがる」

「お前なら知ってるだろ。ただのサボり癖」

いつもの軽い口調で返してくるヒューに、アルフェスは溜め息をついた。

書状は、テイルからのものだった。今までの経緯、現状、そしてこれからの作戦が簡潔に綴られているだけのものだったが、読んだときは仰天した。それこそ、自分も今すぐルートガルドに駆けつけたいとさえ思う。セラの安否が心配で、いてもたってもいられないというのに

「……………」

そこまで考えて、アルフェスははっとした。逆に、困ったように細まった鳶色の瞳を見て確信する。

「……だったら」

ヒューバートは、ただ本当にサボりたいだけでこんなに我を張る人物ではない。確かにしょっちゅうサボるし適当だが、彼は怠惰でもなければ自分勝手でもない。確かにそれは、自分だから知っている。長い付き合いだから。

「だったら、どうしてちゃんとやわないんだ。本当はお前も、ラスが心配なんだろう」

「……誰もそんなこと言っていないよ」

力なくヒューバートがナイフを投げ返して来て、アルフェスはそれを受け止めると服の裏に収めた。

「エレンだってあれでずいぶん憔悴してるからな。……もういい、好きにしる」

「…………わり」

踵を返すと、背中小さな詫びが聞こえ、アルフェスはふっと苦笑した。

それから、元老院とラルフィリエル、エレフォへの言い訳を考えつつ、でかい貸しにしておこうと決める。そうやって貸しばかりつくっても、実際返してもらったことはない。奔放なヒューバートの性格には振り回されてばかりだ。それでも

彼は大事な親友なのである。

t r o u b l e m a k e r (前書き)

四幕「終焉者は謳う」あたりの次兄と四男のお話。

ノックの音に、ラディアスは顔をしかめた。窓の外は濃い闇に沈んでいる。こんな時間に訪ねてくるのは決まって同じ人物で、決まってるような要件ではないのだ。渋面にもなる。

返事を待たず扉は開き、思った通りの人物がそこにいた。

「兄上は、ノックの意味を理解しておられますか？」

「眉間の皺は癖になるぞラディアス。儀礼的なものだ、気にするな」
ノックは儀礼ではなく礼儀としてするものだとか、気にするなというはその尊大な態度のことなのかとか、色々嫌味がよぎったが言ったところでどうなるものでもない。そもそも自分が何か言ったとて反省するような兄ではないから、ラディアスはそれ以上何も言わず、いつものとおり一つしかない椅子を兄に譲る。

「それでな、ラディアス。頼みがあるんだが」

そらきた とラディアスは口の中で溜め息をついた。外見にはなんのリアクションも示さなかったし答えも返していないのだが、構わずレイオスは続けてくる。

「軍を動かしてほしい。ルートガルドに進軍するぞ」

どうせ、こちらが何を言おうがレイオスはやると言ったことはやらせる。だがそれは、結局こちらがやらざるを得ないことだからだ。自分ができないことを、もしくはやっても意味のないことを、レイオスは決して頼んではこない。それは解っているつもりだったが、今回ばかりは驚いて、珍しくラディアスは表情を動かした。

「なんですと？」

「二度は言わん、言った通りだ。すぐに準備をしてくれ」

「いや、待って下さい兄上。戦でもする気ですか？ 父上が倒れ、まだ兄上が王位にもついでいないこの状況で？ 正気の沙汰とは思えません。いったいどうされたというのです」

「私は正気だラディアス。私の言うことに今まで間違いがあったか

？」

ぐ、とラディアスが言葉に詰まる。詰まるのも致し方ないことで、レイオスの采配に今まで過ちなどなかった。しかし。

「兄上を信じていないわけではありませんが。今回ばかりは納得できる理由がなければ、二つ返事とはいきません」

「それは結局信じていないということだな」

「兄上」

ラディアスの語彙に苛立ちを感じ、レイオスはいつもの薄ら笑いをやめた。稀にない兄の真剣な表情に、不満げだったラディアスも押し黙る。

「今だからこそなのだ。今ルートガルドには、ランドエバーの王女が囚われているらしい」

また、ラディアスが表情を揺らす。それは驚愕と訝しみの、両方が混在したものだ。つた。

「ランドエバー王女といいますと……」

「そうだ、先の一件でティルフィアの護衛としてきたあの騎士だ」

「しかし、あの者がやすやすと囚われるとは思えません」

対峙したときのあの闘志を思い出し、ラディアスは素直な感想を述べた。黙ってかどわかされるようにはとも思えないし、そうできるような者が簡単にいるとも思えない。戦えば彼女に勝つ自信はあるが、一筋縄でいかないことは認めざるを得ないだろう。

「その辺は、話すとややこしい。ついでに、今回の件にはティルフィアも関わっている。本当はこの要請も私からではなく、ティルフィアからなのだ」

ついにラディアスは頭を押さえた。とても話についていけない。それにしても

「……またティルフィアですか。どうしてこうも厄介事ばかり持ち込むのですかね」

「あまり邪険にすると件の騎士姫に怒られるぞ。それで、引き受けてくれるのか、ラディアス？」

椅子にふんぞり返るレイオスの横を歩き過ぎ、ラディアスは部屋の扉に手をかけた。

「支度をしてきます」

「ありがとう。後でちゃんと説明する。何、私に間違いはない、不安に思うことはないぞ」

「……どの道ティルフィアが噛んでいるのでは動かないわけにはいかないでしょう。国を出ているとはいえ、一族には違いないのだから」

「君ならそう言うと思っていたよ」

気楽な声が後ろからかかるのに、ラディアスは嘆息した。いつもこうなるのだ。レイオスの前ではどんな問題事も、彼の余興の一部になってしまう。

ティルフィアなどよりこの兄の方が余程厄介なのではないかと、誰にともなく問いたくなって

その愚問を胸にしまい、ラディアスは自室を出たのだった。

v a n i t y (前書き)

四幕「太陽の騎士姫」 4～5あたりのテイルとリユナのお話。

ルートガルドでの騒ぎから数日が過ぎ。

その間、セラ達はリルドシア城に滞在していた。セラは自分で帰ると言い張ったのだが却下され、今はおとなしくライゼスと共にこのルートガルド城で迎えを待っている。別にそれに付き合わねばならない理由はなかったのだが

リユナもまた、セラと共にリルドシア城で日々を過ごしていた。

多分、自分は帰ろうと思えば帰れるのだが、この先セラにそうそう会えなくなると思うとそれは寂しかった。だからできるだけセラと一緒にいたかったのだ。しかし。

「お邪魔虫感が拭えません」

そんな独り言を言いながら、リユナはひとりリルドシア城の中をぶらぶらしていた。

セラの傍にはいつもライゼスがいる。テイルがいればまだ居やすいのだが、テイルはリルドシア城に帰ってからというもの、あまり姿を見せなかった。リユナはここに来てから知ったのだが、テイルは元々このリルドシア王家の間人だそうなので、客であるこちらと一緒に行動するのは、それこそ変なのかもしれないが。

でも多分、テイルが姿を見せないのはそれが理由ではないのだろう。

それをリユナは痛感していた。

「あたしでも若干妬けます」

ぶう、と頬を膨らませ、リユナは誰にともなく愚痴った。だが回廊の途中にテラスを見つけ、そちらへ足を向ける。今日はいい天気だし、リユナは空を見上げるのが好きだった、単にそんな理由だったのだが

先客がいて、リユナは驚いた声を上げた。

「テイルちゃん？」

向こうも少し驚いたようで、長い睫毛を震わせて何度か目を瞬いた。銀髪は風になびくほどの長さがなくなっていたが、太陽光を弾いてリユナは隻眼に手をかざした。

「リユナちゃん。どうしてこんなところに？」

問われて少し答えを迷う。正直に答えたら無駄に傷つけてしまいそうな気がして、リユナは曖昧に答えた。

「可愛い城なので、探索したくなりました」

「そ、そお？ 俺は悪趣味だと思うけどね」

お伽噺に出てきそうな白亜の城。花と緑に溢れた国というキャッチコピーには相応しいが、一族が男ばかりなのでいまひとつアンバランスなのは否めない。ただし、可愛いものの好きのリユナにはあまり関係ないようで、彼女は楽しげに頷いた。

「それにしてもティルちゃんはやけに男前になりましたね。髪が短くなったからかなあ。背も伸びましたよね？」

当たり障りない話題を選んで、リユナはティルの隣に立った。心地よい風が吹き抜けていき、その向かう場所を見上げると明るいティルの瞳とまっすぐにかち合った。

「もう、ちゃん付けで呼ぶのは失礼ですね」

「そうでもないさ」

すぐにその瞳は逸れて、ティルの視線は外を向いた。街並みを見下ろすかのような仕草をしながら、だけどその瞳は何もうつっていないようだった。

「俺は女々しいな。女扱いされてもこれじゃ仕方ないか」

苦さを含んだ軽口は、風に溶けて行く。リユナもまた、ティルを見ている視線を街の方に向けた。

「……ティルちゃんが思う男らしさってというのは、好きなひとを簡単にあきらめられることですか？」

素朴な問いかけに、ティルが動揺したのが空気で伝わる。

「でもあたしは、そんな男らしさなんてかっこいいと思いません」

「ほんとに」

溜め息混じりの言葉に、リユナはもう一度ティルを振り仰いだ。いつの間にか、彼の瞳はまたこちらに戻っている。

「リユナちゃんてば大人だね」

「そう思うなら子供扱いしないで下さいよ」

言いながらもぷうつと頬を膨らませる仕草は子供じみていて、ティルは笑った。

「決着がつくまえに諦めるほうが男らしくないんじゃないですか？」
なのに、月明かりの夜色をした隻眼は美しく、その表情も声も大人びていて、笑みは苦笑に変わってしまう。いくら強がっても取り繕っても、心は全然成長できない自分とはまるで真逆だ。わかっているながら、ツインテールの跳ねるリユナの茶髪を、ティルはぼんぼんと叩いた。

「あつ、今子供扱いしたー！」

「……だから俺は女々しいんだよ。その方が良いと思えないから」
リユナの叫びに被さるように、ティルは自嘲めいた言葉を落としました。気付かないふりをしてリユナはティルの手を跳ねのけようとしたが、そうするまでもなくティルは手を離すと踵を返す。その後ろ姿を見てリユナは口を開き書け、首を横に振った。

多分、自嘲ではないのだ。その可能性に気付いたから、もう一度口を開く。

「……ティルちゃんて、なんだかんだでライゼスさんのこと好きでしょう？」

「嫌いだよ」

即答してから、ティルは首だけでこちらを振り返った。苦虫をかみつぶしたような表情と声で、もう一度彼は同じ単語を落とす。

「死ぬまで、いや死んだって大嫌いだ、ボーヤなんか」

行ってしまったティルを見送りながら、リユナは小さく肩を竦め、「やっぱり、子供ですねえ」

そんな失礼な呟きを落としてから、空を見上げたのだった。

e n v y (前書き)

四幕「太陽の騎士姫1」でのライゼスとティルのお話。

行き過ぎた白刃は唸りを上げてしなり、再びこちらに戻ってくるそれを紙一重で避ける。

リュナの悲鳴にも似た声は意識の外で響き、だがそれをどうしてやることもできなければ構う余裕もなかった。一瞬でも気を抜けば、刀は容赦なくこちらを食うだろう。

ライゼスは唇を噛みしめて、その刀の向こうにいる人物を睨んだ。相も変わらず完璧なる美貌を備え、だがそこにはなんの表情も浮かばない。

ライゼスはこの人物の、名を知っている。生い立ちも性格も、詳しいというほどではないが大体なら知っている。だからとて、仲間でもなければ友達でもない。彼を助けるために死んでやる義理もなければ、傷つけないようにする必要すら感じない。そもそもライゼスは彼のことが嫌いだった。

なのに何故か、彼を助ける方法を、元に戻す方法を模索してしまふ。その理由を探れば、彼を嫌いな理由と同じことに気付いた。

「ライゼスさん！ テイルちゃん！」

今度ははつきりと、近くでリュナの声がした。不安で張り裂けそうな声が届いても、彼の刀は鈍らない。ライゼスは舌打ちすると、早口でスペルを読んだ。光よと、言うことができたのはそれだけだが時刻は朝だ。光の精霊の力は強い。スパークした光が相手の視界を奪う。暗闇では動けても、光は目を潰すだろう。案の定虚は生まれた。

ここで破壊魔法を詠めば、それで終わりだ。仕留めるか利き腕を壊さない限り、彼は向かってくる。手加減してはいけない。だが思いついたいくつかの呪文は口の中で消えた。

「いい加減に、目を覚まして下さい！」

激しく肩を上下させ、息を切らせながら吐いた言葉は、結局呪文

などではなく。

そう、結局、自分は彼を　　ティルを傷つけることはできない。
その理由は。

「セラは、貴方が好きなんです！」

苦みを気にしている場合ではなかった。呪文以上に効果があると思えたその台詞は、だがあっさり斬り裂かれ、再び白刃が目の前に迫る。

『 貴き神の御使いよ！　我が手に寄りて光鱗の盾と成せ！！ 』

火花のように光が飛び散り、掲げた腕が刃を受ける。その刃は腕に食い込むことなく、ぎりぎり光を零し続ける。

「……そんなハツタリ使ってまで勝ちたいか？」

ふと、冷たい言葉が零れた。それに対して湧き上がる感情は、安堵なのか、苛立ちなのか、殺意なのか。そう問われればそのいずれも肯定できるが、実際はどれとも違うものだった。

「負けたって、こんなこと言いたくないですよ」

ライゼスもまた吐き捨てる。ティルは刀を引かず、膠着は続いた。気を抜けばそのまま両断されるかもしれない　だがそんな考えは、ふとかちあつた彼の碧眼が否定した。

きつと彼もまた、こちらを殺せないのだ。

「何故剣を持たない？　そうすれば俺なんか簡単に殺せる筈だ」

「セラに持つなと言われたからです」

短く答えると、ティルは明らかに傷ついたような目をした。だが表向きは表情を動かさないまま、こちらを跳ねのけて間合いを取る。だが息つく暇もなく、彼はまた斬りかかってきた。それを避けながら、ライゼスが再び言葉を紡ぐ。

「貴方こそ。どんな手を使っても、僕からセラを奪うんじゃないかってんですか。今なら僕を殺すことだってできる」

「そうしたいさ。邪魔な奴は全て消して、俺だけのものにしたい、

「そんな」

ティルの刀が大上段から大振りの一撃を繰り出す。もう一度ライゼスは、魔法の盾でそれを受けた。

「最低な人間だ、俺は」

「じゃあそうすれば良いじゃないですか」

間髪入れず返してきたライゼスに、初めてティルは動揺を見せた。光の盾が少しだけ彼の刀を押し返す。

「そうすれば良かったじゃないですか。だけど貴方はセラの元を去った。何故なんです？」

言いながら、あのとときのセラの泣き顔が頭を過ぎった。だがその前からライゼスは気付いていた。

セラは、自分を必要とするのと同じくらいには、ティルも必要としているのだと。

「セラが必要としているのが俺じゃないからだ。セラはお前しか見ていない。だから俺はお前が嫌いだ」

「お互い様ですよ」

問いに答えたティルにそんな風に返すと、ライゼスは苦笑した。

全く似ていないのに。考え方も性格もまるで違うのに。どうして彼女のことになるかと、同じことを考えるのだらう。

「セラには貴方も必要なんです。僕がずっと独占してきた場所に、貴方は一瞬で立ち入ってきた。だから僕は貴方が嫌いです」

「……お前は近くに居すぎて、麻痺してるからそう感じるだけだ」

「それくらい近くにいた僕が、セラのことは一番解っています」

また、刀に力が戻る。だがそれを感じて、ライゼスは呆れた顔をした。

「ところで、そんな詮無い言い合いを僕とするために、貴方は操られてる振りをしていたんですか？」

「まさか」

刀が押してくる、その力の角度が変わる。跳ね除けられ、ライゼスは態勢を崩しかけたが受け身を取って起き上がった。

「セラちゃんが利用されるのだけは我慢ならないんだよ。お前に頭下げる以上にな」

「一体いつ頭を下げたのか聞かせて貰いたいものです」

交わす皮肉は、もういつものような敵意は帯びていない。

今は誰よりもセラのために、この好かない人物と協力することを、互いに決意したのだった。

l o v e l o v e l o v e ! (前書き)

時間軸不明なセラとリュナのお話。

love love love!

「リユナって、好きな人とかいるか？」

セラにとつて、それは本当に何気ない問いだったのだが、それを向けた人物は異常と言っても差し支えない反応を見せた。

明るい茶色のツインテールが真上に吊り上がり、もしかしたら中に骨が入っているのだろうかとセラはたまに思う、こちらを覗きこんだ大きな目は、さらに大きくらんと輝き、小さな両手が両頬をぎゅうと押し、そして興奮に顔を紅潮させて。

「まさかまさか、お姉様にそんな話題を振られる日が来るとは予想しておりませんでした！でもリユナ感激です！一瞬リユナへの遠回しな告白なのかと思つてときめいちゃったのは内緒ですが、あれですね、お姉様は今、あたしに恋愛相談をしようというわけですね!？」

「……ちよつと待て落ち着けリユナ。言っていることが支離滅裂」「落ち着いてます落ち着いてます落ち着いてます」

同じことを三回言う時点で、落ち着いていないことを証明している。だがそれを言つても、とてもリユナは聞いてくれそうにはなかつた。うつとりとして両手を頬に当てたまま、リユナは何もない場所に視線を這わせている。おそらく、どこか遠い世界を見ているに違いない。

「好きな人……好きな人ですか。そうですねリユナの初恋はかれこれ5・6年ほど前でした。お隣に住んでた男の子の爽やかな笑顔に一目惚れして通い詰めでしたね。あの胸が熱くなる感覚は今でも忘れられません」

「胸が熱くなる？」

「そうですね、こう、かーっとしてぎゅーっとして、そしてふわーっとして」

まるで訳がわからない。

だがあまりにリユナが幸せそうに話すので、セラはその言葉を飲み込んだ。どの道、何を言う暇もリユナは与えてくれず、勢い込んで問いかけてくる。

「お姉様は、ないですか。こう、かーっときゅーっつぶわふわーっとなること」

「昔、一度だけ風邪を引いたときにそんな感じだった」

途端、リユナが夢から覚めたような目をしてこちらを見た。

「ほんとにもう、お姉様って……、もう」

地団太でも踏みそうなりユナに、だが何が悪かったのかセラには解らない。解らないであろうことが、しかしリユナには解ってそれがなお一層もどかしい。

だが、これほどまでに色恋沙汰に致命的に興味のなかったセラが、それっぽい話を振ってきたのだ。それだけで大進歩ではないか

思い直して、リユナは地団太を踏むのをやめた。

「でも、どうして突然そんなこと聞くんですか？」

気になったので聞いてみると、セラは困惑したように眉を寄せた。

「いや、なんというか……よくわからなくて」

「好きってことがですか？」

「う、うん。リユナはわかるか？」

「わかるも何も……」

リユナはしゃがんで両肘を膝に乗せ、相変わらず手を両頬に当てたままセラを見上げた。

「むしろお姉様がなんでそんなにわかんないのかのほうが、わかんないです。ライゼスさんとかティルちゃんに対して、何も思わないんですか？」

そんなことを問われ、セラは相変わらず困惑したままリユナを見下ろした。彼女がしゃがんでしまったので話しづらく、セラもまた腰を落とした。

「……二人とも好きだよ。それに、リユナのことも好きだ。父上や母上も」

たりはしないだろう。

むしろ、ライゼスもティルも、そういう等身大のセラだから好きなのだろうと思う。セラにとってあの二人は、いることが当たり前前で、だから両親との気持ちの区別もつけられないのではないか。そんな気がした。

「わっかかりました。お姉様。じゃ、想像してみてください。仮に、ライゼさんやティルちゃんが、お姉様の傍を離れたとして。なんだか寂しかったり悲しかったりしませんか？」

「そりゃ寂しいよ。ていうかりユナがいなくなっただって寂しいし、父上や母上だって」

全く理解しては貰えなかったが、自分がいなくなっても寂しいのだと言ってくれたことに感動して、リユナは胸がいつぱいになった。だが不満そうなセラの顔を見て、あわてて有頂天気分から帰ってくる。

「えっとー、ほら、たとえば、ライゼさんがですなえ、もうお姉様のお守りは飽きたからやめて城を出るーとか……」

尻すぼみにリユナの言葉は消えていった。言っていて、あまりにあり得ないと思ったからである。これでは現実的に考えられない。

「えっと、たとえばたとえば、ティルちゃんが他に好きな女の子ができたからお姉様のことはあきらめる……」

だめだそれもあり得なさすぎる、そう頭の中で呟いて、こちらも尻すぼみに消えた。

半分以上聞き取れず、怪訝な顔をするセラを前にして、リユナは

「お姉様は愛されてますねえ」

なにがなんだかわからない、終始そんな表情のセラを前に、リユナはそう言うしかないのであった。

G i v e m e s m i l e . (前書き)

四幕「太陽の騎士姫6」〜エピローグ間でのセラとティルのお話。

Give me smile .

夜の海というのは、引き込まれそうで空寒い。漆黒の海面はまるで別世界のようだが、そこに引き込まれればまずこの世とはおさらばだろうから、あながち比喩でもないのかもしれない。

以前は髪がべたつくから好きではなかった潮風も、今はそれほど嫌とは感じなかった。それは、髪がすっかり短くなって、不快なほどのべたつきを感じなくなったからだと気付くと、嫌いだったのは潮風ではなくやはり自分の髪なのだろう。

そんなどうでも良いことばかりを考えながら。

ティルは闇空の向こうに目を凝らした。しかしそうしたところで常人離れた夜目を持った彼でも闇の中に何か見つけることはできなかった。それほどまでに祖国はもう遠ざかっている。だから、本当に考えねばならないのはこれからのことだ。

祖国に未練などないが、ランドエバーに居場所があるとは思えない。どうせどこにいても居心地が悪いなら、せめて愛しい人の傍にいたい。でもそれが幸せなのかといえば、痛みの方が強かった。彼女が決して振り向いてくれないことも、その方が良いのだと思えてしまうところも、それを常に痛感させられることも、悔しくて仕方がない。そんな感情が飽和すると、こうして一人にならざるを得なかった。こんなことで、この先耐えられるのだろうか。

溜め息は黒い海に吸い込まれていく。いつそ自分も吸い込まれてしまおうかと思うが、人の気配を感じてそれを実行するのをやめた。どの道実行はしないのだろうか。できるのなら苦勞はしない。

「こんなところにいたのか」

一人になりたいときに限って、彼女は何故か探しに来る。溜め息と憂いの表情を全て海に捨てて、ティルは振り返った。

「どうしたの、セラちゃん」

「どうもこうもない。ティルを探してたんだ」

そんな台詞に、幾分心拍数が上がる。セラのことだ、別に他意があるわけではないことなど解っている。それでも体が熱を帯びるのは、自分ではどうしようもなかった。

「どして？」

ただそれを相手に悟られぬようにすることは容易い。笑いながら軽く問うが、セラは笑い返しては来なかった。

「話があつて。ずっとバタバタしてて、言いそびれていた」

「話つて」

何、と。もう一度問いかけようとしていた言葉は、セラの睨みに阻まれた。理由を考えることもどうしてと問う余裕もなく、硬直している間にセラが左手を振り上げる。殴られると直感で悟ってさらに体を固くするが、

「フエイント」

痛みは警戒していた方とはまったく違うところから来た。直前で警告はしてくれたが、意味を飲み込む暇はくれなかった。セラの右ストレートが腹にクリーンヒットして、声すら出せずにうずくまる。たかだか少女のパンチでと思えば情けないが、相手がセラで、全く警戒してなかったのだから仕方ない。

とりあえずなぜ怒っているのかと聞くために痛みが治まるのを待っている、その前にセラが声を落としてきた。

「……私を騙すからだ」

ぱちくりと、ティルは碧眼をしばたかせた。見上げたセラは、もう睨んではいなかったが、悲しそうな目をしている。それでやっと思い出して、まだ痛みは引いていなかったがティルは立ち上がった。そんな痛みなどどうでも良くなった。

「ごめん」

確かに騙した。エズワース邸でクラストに負けてから一定期間は記憶がないが、少なくともセラに再会したときには完全に自我があった。だがクラストにそれを悟られるわけにはいかなかったから、あの場はああするしかなかったのだ。だがそんなことは言い訳にな

らないだろう。自分がしたことを考えれば。

「本当に、ごめん。気が済むまで殴ってよ。いつそ斬ってくれたっていい」

ティルは手を伸ばすと、セラの首筋に触れた。セラはその手のあまりに冷たいのに眉をひそめながら、その場所がティルに斬られた箇所であることを思い出していた。再び目を戻したティルの顔があまりに悲痛で、さっき殴った手でティルの手に触れる。

「私は騙されたから怒っているんじゃないぞ」

案の定怪訝な顔をしたティルを、セラは少し苛立ちながら見つめ返し、言葉を継いだ。言わないと多分解らないのだろう。

「そうするしかなかったのは解ってる。でも、どれだけ心配したか、ティルは解ってないだろう？ だから殴った」

思いもかけなかった言葉に、ティルはぼかんとした。だがじわりとその言葉が浸透していくに連れ、視界が滲んでいく。慌ててティルはセラの手を振りほどこうとしたが、セラは逆にその手を掴んだ。

「ティル」

「待って、その、いや、これは鼻水で」

「……お前は目から鼻水が出るのか？」

呆れながら、一応セラは突っ込んだ。必死にこちらに背を向けようとする彼の、その手を握りしめてそれを止める。

「ティル。ティルはいつも、悲しいときでも笑うから、ちゃんと笑えないんだ。悲しいときはちゃんと泣け」

そう言うと、ティルの抵抗は止んだ。握りしめた手は少しずつ温もりを増して、そしてやがてためらいがちに握り返される。月明かりに照らされたティルの美貌が、この世のものとは思えぬほど美しい笑みを刻んだ。

「………悲しいから泣いてるんじゃないよ。今までそんな風に叱ってくれる人なんか、いなかった」

今まで決して近づけなかった距離が、ほんの少し埋まるのを感じて。

セラもまた笑った。

「テイルは一人じゃないんだからな」

その笑顔を。

壊さなくても傍にいられるくらいの強さを、これから身につけるのだと。

それは、自分を偽り続けた日々よりずっと辛い戦いかもしれない。それでもテイルは強く誓った。

例えば彼女が誰を選んでも誰を見ているも、その笑顔を守れるようになれれば良い。

そんなわけで、手始めに、握った手を引き寄せない戦いから挑み始める。

なかなか困難で、少しだけテイルは苦笑したのだった。

m i s c h i e f (前書き)

本編終了後のセラとライゼスのお話。

清々しい朝の空気で肺を満たしながら、ライゼスは浮足立って回廊を歩いていった。講義室の扉をきつちり二回、ノックする。中からの返事があることには、未だに感動してしまう。

講義の時間に、講義室に講義を受ける人はいないことが常識になりつつあった人生なのだから、仕方ない。

扉を開けると、そこには見慣れた人物がいる。長いアツシユブロンドを頭の上の方で束ね、切れ長のアイズグリーンの瞳をこちらに向けた、凜々しい少女。彼女はこの国の王女だが、ドレスをまとわないのは変わらない。Ｔシャツにジーンズという、町娘ですらない格好はどうかと思うが、彼女が机に向かっていてという感動にそれもまた薄れてしまう。人物は見慣れているが、その光景はどうにも慣れないものだ。

動機はなんであれ、彼女が大人しく講義を受けてくれるのは良いことだ。そして今日はさらにもうひとつ、良いことがあった。

「あれ、ティルは？」

セラの問いかけに、ライゼスは満面の笑みを浮かべそうになり、いやさすがにそれはあからさますぎるかと慌てて取り繕う。

「里帰りだそうですよ」

ふうん、とセラが頷き、ライゼスは講義室の扉を閉めた。

結局、匙を投げたセラの教育係は戻ってくることはなく、いくら大人しくなったとはいえ、この問題のありすぎるじゃや馬姫に関わりたい手合いはあまりいない、セラの教育係はライゼスとティルの二人が受け持っている。宮廷学士のライゼスと元姫のティルの二人で受け持てば、セラが受けるべき教育や作法は全てカバーできるので、丁度いいと呑気に国王は笑っていた。それについてはこの際もういいのだが、受け持ちの科目でないときでもティルは四六時中セラにべったりで、正直邪魔だ。決してやつかみではなく、

「今日は集中して講義ができそうですね」

だから今日ライゼスは機嫌がいい。だが、逆にセラの元気が若干なくなつた気がして、それに気付くとライゼスは浮かれてばかりもいられなくなつた。

「……どうかしましたか？」

「いや」

セラはそれだけ言って、だがどこか上の空で。

なんとなくライゼスが授業を始めそびれていると、セラはやがて浮かない声で話しかけてきた。

「あのさ……ティルがリルドシアとランドエバー、どちらに残るか
つて話をしたとき、思わずランドエバーに居て欲しいなんて言つて
しまつたけど、私は間違つていたのかな」

所在なく羽ペンをくるくると手の中で回し、セラがそんなことを
言う。

「家族のところ居たほうが、ティルにとっては良かったのかもし
れないって思つて……。ラスはどう思う？」

問われて、ライゼスは困つたように眉を寄せた。そして、見つめ
てくるセラから目を逸らす。

「どうして僕に聞くんですか」

なんとも答えようがなかった。

それよりも、どうしてこう気持ちが悪くなるのだろうか、
その正体を突き詰めようとしていると、セラが溜め息をついたのが
聞こえてそちらを向く。

「……冷たいな。相談に乗ってくれてもいいじゃないか」

だったら、相談する相手を選んでくれてもいいじゃないかと言
かけて、ライゼスは口をつぐんだ。もやもやした気持ちの正体が解
つてしまつたからだ。

「ラス、少し変わったよな。昔はもつとなんでも話を聞いてくれた」
責めるように どちらかといえば拗ねるようにそう言われ、頭
痛がしてくる。確かに、変わっただろう。だけど立場も変わったこ

とを、セラは理解してはいないようだ。

「……僕はセラのなんなんですか？」

「……？」

質問の意味が解らないのか、セラは答えられない。そんな彼女に聞こえないように、ライゼスはもう一度溜め息をついた。

先の一件で、レイオスがとんでもないことを言い、セラがそれを真に受けて。

周囲が下した決断と、増えた新しい自分の肩書は、こういうものだった。

『セリエラ王女（じゃじゃ馬暴れ姫）の婚約者（という名の一生お守り役候補）』、ちなみに同じ肩書を押しつけられた者がもうひとり。

長い溜め息を終えると、ライゼスは持っている教科書を、全て机の上に放った。

「天気も良いですし。どこかに行きませんか？」

途端、ぱつとセラが笑う。どうすれば彼女が喜ぶかなど心得ている。だがあえてそれを実行に移したことなどそういえばなかったなと、今さら気づいてライゼスは苦笑した。

「いいのか？」

「最近サボらず講義に出ていますからね。たまには良いでしょう」
歓声を上げるセラを見て、ライゼスも笑う。講義室から中庭に出ると、本当に良い天気で、風も気持ちいい。

遠乗りにも行こうかと馬屋に来たが、あいにく馬は一頭を残して出払っていた。

「残念だな」

肩を落とすセラを見て、ライゼスが苦笑する。

「僕とタンDEMはそんなに嫌ですか？」

「私が前なら構わないぞ」

いつかのやりとりを思い出し、二人は顔を見合わせて笑った。あ
のときは苦勞したのだのなんだのと、ひとしきり思い出話に浸ったあ

とに、ふとライゼスはあることを思いつく。およそ自分らしくない悪戯を思いついた。いつもならきつと、思ついてもやらないのだが

「だったら、前を譲りますよ。どうぞ」

意外そうにこちらを見るセラに、涼しい顔で笑つて見せる。

今日は本当に、らしくないことばかりしている。

怪訝な顔をしながらも馬にまたがったセラの、だがその手が空を搔く。あつと思う間もなく馬は素晴らしいスピードで走り出す。

「ラ、ラス！」

こちらを抱え込むようにして後ろに乗ったライゼスを振り返り、その大きさにセラは息を飲んだ。幼い日、父にこうして乗せてもらったのを思い出す。手綱を握る手も大きくて、セラはどきりとした。どうしてか解らないが、顔が熱くなる。抵抗するように呼んだ名は、優しく微笑む瞳に受け流されてセラは言葉を失くし、諦めて彼の胸にもたれかかる。

そのぬくもりは、父のそれに良く似ていた。

「なんだか 父上みたいだな」

微笑むセラがつぶやいた台詞は、やっぱり複雑なものだったが。

久しぶりの二人きりの午後を満喫するのに成功したのだから良しとする。

(まあ……これくらい、ぬけがけには入りませんよね)

朝から恋敵の話をされた仕返しだということは、誰にも内緒だ。

m i s c h i e f (後書き)

これにて外伝集も終了です。お付き合いに心より感謝致します。ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7677j/>

キシヒメ番外編集

2010年10月23日12時43分発行